

『鳳城聯句集』訓注稿（七）

楊昆鵬

本稿は版本『鳳城聯句集』に所収されている聯句作品について、試みに読み下しを施し、注釈を付けたものである。前稿（本誌第四一号、平成三十一年四月）の続きとして、全三十作のうち、第二十四から第二十六までの三点をここに掲載する。

【凡例】

- ・ 五言句の冒頭に通し番号を付した。
- ・ 漢字の字体は原則として現在通行のものに統一した。
- ・ 訓点は底本のままにし、読み下しは原則として訓点に従うが、一部句意に基づき変更したこともある。なお、読み下しに適宜濁点を施した。
- ・ 判読不可能の箇所は■とし、明らかな誤字もそのまま翻刻し、語注において説明を加える。
- ・ 注は最小に止め、故事出典を示し、一部熟語の用例を示す。

青第九 慶長十六年十二月六日
夢想聯句

1 相見 ^ル 鳳麟 ^ノ 瑞	相見る 鳳麟の瑞	
2 無 ^シ 疆 ^リ 龜鶴 ^ノ 齡	疆 ^カ り無し 龜鶴の齡	御
3 操清 ^ク 松傲 ^ル 雪 ^ニ	操清くして松雪に傲る	節
4 祝讚 ^ヲ 栢 ^ヲ 祈 ^ル 廷 ^ヲ	祝讚 ^② 栢廷を祈る	雲
5 今 ^ノ 舜 ^ノ 天生 ^レ 徳 ^ヲ	今の舜 天徳を生せり	潤
6 隠 ^{レル} 顯 ^ル 嶽 ^ノ 潜 ^ル 形 ^ヲ	隠れたる顯 ^③ 嶽形を潜む	竹
7 文 ^ノ 林 ^ノ 秋不 ^レ 素 ^{ナラ}	文林 秋は素ならず	廣
8 衆 ^ノ 水 ^ノ 月分 ^レ 熒 ^ヲ	衆 ^④ 水 月熒を分かつ	梅心
9 程 ^ハ 幾 ^ク 叫 ^ブ 雲 ^ニ 雁	程は幾ばくぞ雲に叫ぶ雁	召
10 原常 ^ニ 並 ^ル 影 ^ヲ 鶴	原常 ^⑤ に影を並ぶる鶴	令 ■

(1) 『詩経・邶風』「称彼兕觥、万寿无疆」など、長寿を祈る意。

(2) 神仏に祈祷し加護を願う。漢詩に限らず禅籍にも用例は稀である。

(3) 戴顓、南朝宋の人、会稽の剡県や桐廬県の名山に隠居した(宋書・隱逸伝・戴顓伝)。

(4) 多くの水、合流する複数の河川。杜甫「衆水会涪万、瞿唐争一門」(長江二首、其の一)など。

(5) 『詩経・小雅』「鵲在巢、兄弟急難」。鵲は脊令と同じで、「鵲原」という熟語で兄弟間の愛情をいう。作者は底本の不明瞭により定め難い。

11 摘英詩苑 谷 英を摘む 詩苑の谷 賢

12 刻木孝門 丁 木を刻む 孝門の丁 重

13 世酔名淫利 世は名に酔ひ利に淫ふ 御

14 道先教後刑 道は教を先にし刑を後にす 節

15 来前容諫履 来り前め諫を容るる履 雲

16 奇法洗心経 奇にして法あるは洗心経 澗

17 陽動梅資始 陽動きて梅資りて始む 竹

18 露濃 露濃やかにして 權暫く停む 廣

19 浄邦回潔巳 浄邦 回は巳を潔くす 心

20 点滴操伯伶 点滴 伯は伶を操る 召

(6) 丁蘭が亡き父母の像を木で彫刻し、大事に仕えた。『二十四孝』や『蒙求』などにみえる。

(7) 『荀子・宥坐』「故先王既陳之以道、上先服之。若不可、尚賢以慕之。若不可、廢不能以單之。慕三年而百姓從風矣。邪民不從、然後俟之以刑、則民知罪矣」。

(8) 『易経』のこと。蘇軾「齋罷何須更臨水、胸中自有洗心経」(贈治易僧智周)。

(9) 浄土。策彦周良「祇言浄邦九品台、不悟本来無一物」(天正三禩五月某日(以下略)など。「回」は顔回、「潔巳」は「己を潔くす」の誤写か。

(10) 「伶」は伶倫。音楽を司る官で、黄帝に仕えたという。「昔黄令伶倫作為律」(呂氏春秋・古楽)。ここでは音楽の意。「伯」は伯牙、琴を善くした。

21 才夏 才かに夏たつ 鴉は鶯様 悦

22 用時鼠虎 用ひる時 鼠は虎 賢

23 威風 威風 八表に風あり 節

24 補^レ処^{シム} 処^{シム}長^一汀^一 補^レ処^{シム} 長汀を処らしむ 雲

25 帰^一身^一千^一億 帰^一身^一は千^一億^シ 澗

26 出^レ群^ナ 声^四 出^レ群^ナ 声は四^一溟^シ 心

27 追^レ波^テ魚^ヲ擺^{ラフ}尾^ヲ 波を追ひて魚尾を擺^ハふ 御

28 横^レ浦^ニ鷺^ヲ翻^ス翎^ヲ 浦に横たわりて鷺翎を翻す 節

29 蘆^ハ我^カ御^レ寒^ヲ被^レ 蘆は我が寒さを御く被 召

30 苔^一兄^一 困^レ座^ヲ屏^一 苔^一兄^一 座を困む屏 竹

(11) 夏になつたばかりで、杜鵑が鶯の格好を帯びるという意か。使用例は未見。

(12) 宋王炎「人生虎鼠在用舎、未用以此相瑕疵」(除日出江上迂趙憲)。「用」は官職登用。

(13) 八方よりも先の遠い場所。陶淵明「雲鶴有奇翼、八表須臾還」(連雨独飲)。黄庭堅「終風霾八表、半夜失前山」(題伯時画松下淵明)。月舟寿桂「風霾八表南山暗、三径余花易色来」(墨菊)。

(14) 仏語、一生補処。

(15) 『錦繡段』に陸游「何方可化身千億、一樹梅花一放翁」(梅花絶句六首、其三)とあり、五山僧に好んで受容された。

(16) 四方の海、また天下。蘇軾「侍郎賦詠窮三峽、妃子煙塵動四溟」(再次韻曾仲錫荔枝)。

(17) 綿ではなく、蘆の穂を入れた布団で寒さを防ぐという。「被」は布団。二十四孝の閔子騫の故事がよく知られる。(18) 「苔兄」の使用例は未見。石屏に苔が生えることか。後考を待つ。

31 灰^一看^ス無^炭 灰^一看^ス 無^炭の軾 廣

32 日^一課^一誦^レ經^ノ寧^一 日^一課^一す 誦^レ經^ノの寧^一 御

33 禪^一味^一祖^一求^ム飽^ヲ 禪^一味^一 祖^一は飽^一を求^ムむ 悦

34 雅^一音^一儒^側 雅^一音^一 儒^側は聆^レを側^ツつ 澗

35 覺^一鞭^一書^ニ有^レ馬^一 覺^一鞭^一 書^ニに馬^一有り 竹

36 法^一席^一鼓^一如^シ靈^一 法^一席^一 鼓^一は靈^一の如^シ 廣

37 幽^一桂^一台^一耶^カ徑^一 幽^一桂^一 台^一か徑^一か 雲

38 釣^一竿^一渭^ト与^ト涇^一 釣^一竿^一 渭^トと涇^トと 心

39 太^一公^一辛^一邁^レ古^一 太^一公^一 辛^一の古^一に邁^ルふ 澗

40 乙^一子^一鯉^一趨^レ庭^ニ 乙^一子^一 鯉^一の庭^ニに趨^ルる 竹

- (19) 王安石「薄飯午不羹、空炉夜無炭」(送番執中秀才帰高郵)。清叔寿泉「空炉無炭布衾薄、枕上吟詩到曉更」(「夜寒無夢」)。「灰看」は熟語として使用例は未見。蘇軾「白灰如積雪、中有紅麒麟」(贈月長老)と関聯があるか、不明。
- (20) 一山一寧。元の使者として来朝。
- (21) 傾聴すること。孟郊「側聆故老言、遂得旌賢愚」(旅次湘沅有懷靈均)など。
- (22) 「覚鞭」の使用例は未見。書中に馬がある。『古文真宝』冒頭「真宗皇帝勸学」に「出門莫恨無人随、書中車馬多如簇」とある。
- (23) 江淹「蘭径少行跡、玉台生網糸」(文選「雜体詩三十首、其十二」。法会が催された寺院か。
- (24) 『詩経・邶風』「涇以渭濁、湜湜其沚」。涇渭二水はよく対照される。渭水に呂尚が釣りした。東第一70句に既出。
- (25) 「邁」は勉めること。「邁古」は勉めて古代に習い、また超えること。ここでは「邁」を「ならふ」と読む。「辛」は周に従い仕えた辛甲。呂尚がその経験に倣うという意か。
- (26) 前句の「辛」が「甲」を暗に含むので、「乙子」と付けたか。「乙子」は漢語に使用例がなく、和語の「おとこ」すなわち末っ子の意味か。英甫永雄「蚩蚩縦は誇秦火、乙子壁中蔵魯論」(蚩入燕巢)もある。「鯉」は孔子の唯一の子、庭を横切ったところ孔子に学問を聞かれた故事。

41 何ぞ蚪胸中、語 何ぞ蚪胸中の語 節

- 42 浮^レ蛆^ヲ若^下 醜 蛆を浮かぶ 若下の醜 心
- 43 深^ス蔵^ス霞^際杏 深く蔵す 霞際の杏 召
- 44 料^リ識^ス閨^余萸 料り識す 閨余の萸 御
- 45 莫^レ縛^ル言^堯口 縛すること莫かれ 堯を言ふ口 節
- 46 可^レ彫^戒誦^銘 彫りつべし 誦を戒むる銘
- 47 商^颺桐^似剪^ニ 商颺 桐は剪るに似たり 雲
- 48 佳^節菊^惟馨^{ハシ} 佳節 菊は惟だ馨し 御
- 49 車^ハ必^南遊^蝶 車は必ず南遊の蝶 心
- 50 柄^ハ常^北斗^星 柄は常に北斗の星 廣
- (27) 「蚪」字は秋の蟬というが、「蚪」の訓詁は不明、後考を待つ。
- (28) 「浮蛆」と「若下」とともに酒をいう。蘇軾「浮蛆氷盤薦文鮪、玉壘傾浮蛆」(答任師中家漢公)など。
- (29) 萸莢、伝説上の瑞草、莢の数と増減によって暦が計算できる。先第一24に既出。「料識」は中国の漢詩に用例が稀であるが、五山禅僧の詩作では「おしはかり、知る」の意味で多く用いられる。天隠龍沢「雪鵠風雁在呼群、

料識阿兄頻夢君」(和雲心寄阿兄友松)など。

(30) 堯の発言か。蘇軾「新年对宣室、白首代堯言」(用旧韻送魯元翰知明州)。劉克莊「文名史学都休矣、追誦堯言一泫然」(史稿)。

(31) 『孔子家語』「孔子觀周、遂入太祖后稷之廟。廟堂右階之前、有金人焉、三緘其口、而銘其背曰、古之慎言人也、戒之哉。無多言、多言多敗。」(觀周)。

(32) 「商飈」は秋風。司馬光「西風又剪梧桐葉、不見蒲団旧主人」(悼静照堂僧)ほか、宋詩によく見られる。

(33) 「南遊」は『孔子家語』「親没之後、南遊於楚、從車百乘、載粟万鍾」(致思)、『莊子』「子貢南遊於楚、反於晋、過漢陰」(天地)など一様では無い。

51 失^ハ秦^ニ儀^ヲ弁^レ果^ス 秦の儀が弁を失ふは果

52 唆^ハ檠^ノ睦^ノ機^ニ邢^ト 檠の睦の機に唆さるるは邢

53 愁^ト毒^ヲ蔑^ル鳥^ノ堇^ヲ 愁毒 鳥堇を蔑ろにす

54 靈^ト方^ヲ剂^ス兔^ノ苓^ヲ 靈方 兔苓を剂す

55 仏^ハ医^ノ王^ノ妙^ノ術^ヲ 仏は医王の妙術

56 宗^ハ活^ノ衲^ノ英^ノ劍^ヲ 宗は活衲の英劍

57 吐^レ氣^ヲ斬^ル痴^ヲ劍^ヲ 氣を吐く 痴を斬る劍

58 占^レ軍^ヲ告^ル吉^ヲ鈴^ヲ 軍を占ふ 吉を告ぐる鈴

59 好^ク逮^テ安^ノ遠^ノ帛^ヲ 好逮 安遠帛

60 会^シ聖^ヲ洞^ノ曹^ノ青^ヲ 会聖 洞曹青

(34) 臨濟宗創始者の義玄か。俗姓は邢、曹州の人。「睦」は睦州龍興寺に居し、黄檗希運禪師法嗣の陳氏のことか。

(35) 堇草、別名烏頭、毒有り。烏頭に毒があると詠む詩例として、策彦周良「向來敬為烏頭子、一朵梅花一片香」(贊北野天神入唐画像)など多く見られるが、ただしこの例の場合の烏頭は無準師範をいう。前句の禪宗高僧に因んで、無準禪師を連想するも、その号の烏頭子を付けて植物として詠む。

(36) 兔糸茯苓、いずれも貴重な生薬。『淮南子・説山訓』「千年之松、下有茯苓、上有兔糸」。王安石「兔糸茯苓会当有、邂逅食之能寿考」(酬王潜賢良松泉二詩、其一、松)。

(37) 「劍」は刀で物を切り分けることをいう。または劍利、「伶」に同じとも。「英劍」の使用例はごく稀で、意味は不明。「医王」は仏。

(38) 宋釈慧開「執劍呂洞賓賛」詩に「露刃单提、行殺活令。斬貪嗔痴、群魔乞命」とみえる。この句の劍は、前句にある「劍」からの連想か。

(39) 檐に懸かる鈴の響きで占いする。『晋書』「又能聽鈴音以言吉凶、莫不懸驗」(卷九十五、芸術、仏図澄)。

(40) 晋の高僧道安とその弟子の慧遠か。「帛」は仏図澄のこ

とか。道安は仏図澄の弟子で、仏図澄の本名が帛。

(41) 「洞曹」は洞山良介と曹山本寂、すなわち曹洞宗の創始者。「青」は青原行思、六祖慧能の門下、曹洞宗は南宗青原法系である。

61 花_ハ地_チ易_ヘ然_シ然_シ落_{ロク} 花地 易へば然んの落

62 瓜_ウ一_{イツ}田_{テン}已_ニ熟_ス斫_{シツ} 瓜田 已に熟す斫

63 勇_{ユウ}一_{イツ}從_フ吟_{イン}境_{キョウ}一_{イツ}杖_{シヤウ} 勇み従ふ 吟境の杖

64 競_{ケイ}一_{イツ}渡_ド急_{キツ}灘_{ナン}一_{イツ}舡_{セン} 競ひて渡る 急灘の舡

65 遁_{テン}一_{イツ}寄_キ寂_{シツ}喧_{ケン}巷_{キヤウ}一_{イツ} 遁れては寂を喧巷に寄す

66 誓_チ一_{イツ}期_キ一_{イツ}遇_ユ一_{イツ}杳_{ヤウ}一_{イツ}冥_{メイ}一_{イツ} 誓ひては遇を杳冥に期す

67 阿_ア一_{イツ}私_シ一_{イツ}交_{コウ}主_{シュ}一_{イツ}淡_{タン}一_{イツ} 私に阿りて交ひに淡を主とす

68 近_{キン}一_{イツ}講_{コウ}一_{イツ}執_{シツ}神_{シン}一_{イツ}聽_{テイ}一_{イツ} 講に近づきて孰れか聴を神とす

69 閑_{カン}一_{イツ}作_サ一_{イツ}伴_{バン}一_{イツ}閑_{カン}一_{イツ}鷗_ウ一_{イツ} 閑作 閑に伴ふ鷗

70 節_{セツ}一_{イツ}忠_{シュウ}一_{イツ}竭_{ケツ}一_{イツ}節_{セツ}一_{イツ}纒_{マキ}一_{イツ} 節忠 節を竭す纒

(42) 驪山の硯谷、秦始皇帝が坑儒した場所。『太平御覧』「古

文奇字曰、秦改古文以為大篆及隸字、人多誹謗怨恨、秦苦天下不從而召諸生、到者捋為郎、凡七百人。又密冬月種瓜於驪山硯谷之中温処。瓜実成乃使人上書曰冬瓜有実」(皇王部十一、始皇帝)。「雪叟詩集」当頭陷四百人了、阿鼻無間硯谷中」(瓜皮獄)。

(43) 奥深く暗い、また遙か遠いこと。『楚辞・惜誓』に「馳驚于杳冥之中兮、休息虜昆侖之墟」とみえる。

(44) 「阿」はおもねる、媚びへつらうこと。「主淡」の用例として黄庭堅「七均師無声、五和常主淡」(和邢惇夫秋懷十首、其三)とみえる。句意は不詳。

(45) 『聚分韻略』に「纒羊ヒツジ、カモシシ」とある。「竭節」は忠誠を尽くすこと。盧全「竭節遇刀割、輪忠遭禍纒」(感古四首、其二)。

71 嚙_{セツ}一_{イツ}蘇_ソ一_{イツ}救_{キウ}一_{イツ}餓_{ガク}一_{イツ} 嚙を噛みて蘇は餓を救ふ

72 祭_セ一_{イツ}粽_{ソウ}一_{イツ}屈_{クツ}一_{イツ}憐_{レン}一_{イツ}醒_{セイ}一_{イツ} 粽を祭りて屈の醒むるを憐れむ

73 楓_{フウ}一_{イツ}橘_{キツ}一_{イツ}添_{ソフ}一_{イツ}湘_{シヤウ}一_{イツ}景_{キョウ}一_{イツ} 楓橘 湘景を添ふ

74 芸_{ゲイ}一_{イツ}藜_{レイ}一_{イツ}照_{シヤウ}一_{イツ}祿_{ロク}一_{イツ}一_{イツ} 芸藜 祿櫺を照らす

75 疑_ギ一_{イツ}仁_ニ一_{イツ}者_{シャ}一_{イツ}硯_{イン}一_{イツ} 寿にして仁者を疑ふは硯

76 戦_{セン}一_{イツ}率_{ソツ}一_{イツ}士_シ一_{イツ}兵_{ヘイ}一_{イツ}一_{イツ} 戦ひて士兵を率ゆるは軒

77 如^カ不^ニ縦^ハ 又^{ナラ} 又^{ナラ} 路^チ 如^ヨくに 縦^ほならざるは又路

悦

78 官^{クワン} 難^ナ守^シ 拘^コ 圍^イ 官^{クワン}の守^シり難^ナきは拘^コ圍^イ

澗

79 何^{ナニ}憂^ウ含^ム涙^{ナミ} 薬^{ヤク} 何^{ナニ}の憂^ウいぞ 涙^{ナミ}を含^ムむ薬^{ヤク}

召

80 此^{ココ}性^{セイ} 濼^{ハス}蹤^ツ 萍^{ヘイ} 此^{ココ}の性^{セイ} 蹤^ツを濼^{ハス}は萍^{ヘイ}

心

(46) 芸^{ゲイ}編^{ヘン}と藜^{レイ}杖^{シヤウ}。芸^{ゲイ}編^{ヘン}は書^{ショ}物^{モノ}の虫^{ムシ}除^ジけと^{ナリ}なる香^{カウ}草^{ソウ}、転^{テン}じて書^{ショ}籍^{セキ}を^イう。藜^{レイ}杖^{シヤウ}は青^{セイ}藜^{レイ}杖^{シヤウ}の故^コ事^ジ。劉^{リウ}向^{キヤウ}が天^{テン}禄^{ロク}閣^{カク}で校^{キヤウ}書^{ショ}し

(47) 蘇^ソ軾^{シヤク}「龍^{リウ}尾^ビ硯^{イン}歌^カ」の末^{マツ}句^クに「願^{ガン}從^{ジュウ}蘇^ソ子^シ老^{ラウ}東^{トウ}坡^パ、仁^ニ者^{シヤ}不^フ用^{ユウ}生^{シヤウ}分^{フン}別^{ベツ}」とある。

(48) 獄^{イク}中^{チュウ}に拘^コ置^シされ^ルこと。韓^{カン}愈^ユ「下^カ陰^{イン}疑^イ墮^ダ井^{ケイ}、守^シ官^{クワン}類^{レイ}拘^コ圍^イ」(答^{トウ}張^{テイ}徹^{テツ})と、仕^シ官^{クワン}の難^ナしさを^イう。

(49) 孫^{ソン}楚^ソ、字^ジ子^シ荊^{ケイ}、「枕^{シヤク}石^{シヤク}漱^ソ流^{リウ}」を「枕^{シヤク}流^{リウ}漱^ソ石^{シヤク}」と^イい間^マ違^{チガ}えた。前^{ゼン}句^クの、水^{スイ}に揺^ユらぐ萍^{ヘイ}を承^{テイ}けて、鴨^{カウ}また「流^{リウ}」を^イ連^{レン}想^{キヤウ}。

(50) 姬^キ姓^{セイ}の^{コト}か、不^フ詳^{キヤウ}。「蛭^{シヤク}」は蜻^{テイ}蛉^{レイ}。日^{ニッ}本^{ポン}国^{コク}土^トの^{コト}。

(51) 足^{ソク}を^ア挙^{キヤウ}げ^ルこと。漢^{カン}詩^シには人^{ニン}間^{カン}や鷲^{リウ}な^ドの鳥^{トウ}に用^{ユウ}い^ル例^{レイ}が^オ多^クい^クが、馬^バで^ノ用^{ユウ}例^{レイ}は稀^キで^アる。こ^ノこは蘇^ソ轍^{テツ}「施^シ崇^{チュウ}寧^{ネイ}寺^シ馬^バ」の「法^{ホフ}流^{リウ}一^{イツ}洗^{セン}百^{ヒャク}病^{ビヤウ}消^{シヤウ}、翹^{セウ}足^{ソク}長^{チヤウ}鳴^{メイ}且^キ忘^{ワウ}老^{ラウ}」を^ア踏^{テイ}ま^エえ^ルか。底^{テイ}本^{ポン}で「駟^シ」と^アる^ガ、青^{セイ}韻^{イン}「駟^シ」(牝^{ヒメ}馬^バ)の^ア誤^ゴ写^{キヤウ}か。

81 称^{テイ}楚^ソ 枕^{シヤク}流^{リウ} 鴨^{カウ} 楚^ソと^イ称^{テイ}す 流^{リウ}れに枕^{シヤク}する鴨^{カウ}

竹

82 属^{リョク} 姬^キ 函^{コウ} 国^{コク} 蛭^{シヤク} 姫^キに^オ属^{リョク}す 国^{コク}を^オ函^{コウ}する蛭^{シヤク}

賢

83 東^{トウ}蓬^{ホウ} 於^オ 駿^{ケン} 廋^{シュ} 東^{トウ}蓬^{ホウ} 駿^{ケン}に^オ於^オいて廋^{シュ}

澗

84 西^{セイ}子^シ 比^ヒ 湖^コ 媯^{コウ} 西^{セイ}子^シ 湖^コに^ヒして媯^{コウ}よし

節

(52) 『春秋左伝』「美哉禹功、明德遠矣。微禹、吾其魚乎」(昭公元年)。「莊」以下の句意は不明だが、『莊子』で

85 蘭^{ラン} 秀^{シウ} 諳^{セン} 香^{カウ} 徑^{ケイ} 蘭^{ラン}秀^{シウ}で^テ香^{カウ}徑^{ケイ}を^シ諳^{セン}す

召

86 棘^{シヤク} 蕃^{ハン} 鎖^サ 矮^{タイ} 局^ク 棘^{シヤク}蕃^{ハン}く^シて矮^{タイ}局^クを^シ鎖^サす

賢

87 吞^{ツン} 声^{セイ} 霜^{ソウ} 後^コ 蜂^{ホウ} 声^{セイ}を^ア吞^{ツン}む 霜^{ソウ}後^コの蜂^{ホウ}

雲

88 翹^{セウ} 足^{ソク} 樞^{シュ} 間^{カン} 駟^シ 足^{ソク}を^ア翹^{セウ}く 樞^{シュ}間^{カン}の駟^シ

召

89 微^ミ 禹^ユ 莊^{シヤウ} 寧^{ネイ} 羅^ラ 実^{ジツ} 禹^ユ 微^ミり^セば莊^{シヤウ}は寧^{ネイ}ろ実^{ジツ}ならん

廣

90 酌^{シヤク} 康^{カウ} 欧^{オウ} 欲^{ヨク} 瞑^{メイ} 康^{カウ}を^ア酌^{シヤク}みて欧^{オウ}瞑^{メイ}せんと^シ欲^{ヨク}す

御

(49) 孫^{ソン}楚^ソ、字^ジ子^シ荊^{ケイ}、「枕^{シヤク}石^{シヤク}漱^ソ流^{リウ}」を「枕^{シヤク}流^{リウ}漱^ソ石^{シヤク}」と^イい間^マ違^{チガ}えた。前^{ゼン}句^クの、水^{スイ}に揺^ユらぐ萍^{ヘイ}を承^{テイ}けて、鴨^{カウ}また「流^{リウ}」を^イ連^{レン}想^{キヤウ}。

(50) 姬^キ姓^{セイ}の^{コト}か、不^フ詳^{キヤウ}。「蛭^{シヤク}」は蜻^{テイ}蛉^{レイ}。日^{ニッ}本^{ポン}国^{コク}土^トの^{コト}。

(51) 足^{ソク}を^ア挙^{キヤウ}げ^ルこと。漢^{カン}詩^シには人^{ニン}間^{カン}や鷲^{リウ}な^ドの鳥^{トウ}に用^{ユウ}い^ル例^{レイ}が^オ多^クい^クが、馬^バで^ノ用^{ユウ}例^{レイ}は稀^キで^アる。こ^ノこは蘇^ソ轍^{テツ}「施^シ崇^{チュウ}寧^{ネイ}寺^シ馬^バ」の「法^{ホフ}流^{リウ}一^{イツ}洗^{セン}百^{ヒャク}病^{ビヤウ}消^{シヤウ}、翹^{セウ}足^{ソク}長^{チヤウ}鳴^{メイ}且^キ忘^{ワウ}老^{ラウ}」を^ア踏^{テイ}ま^エえ^ルか。底^{テイ}本^{ポン}で「駟^シ」と^アる^ガ、青^{セイ}韻^{イン}「駟^シ」(牝^{ヒメ}馬^バ)の^ア誤^ゴ写^{キヤウ}か。

100 典^レ代^ニ聖基訂^ス 代に典^{リテ}聖基訂^ス 廣

は名実の議論があり、句意と関係あるか。
 (53) 「欧」は欧陽脩。「酌康」は飲酒の意味で、欧陽脩作の「醉翁亭記」を念頭に置いたか。また「欲瞑」とは欧陽脩の「憎着蠅賦」に「蠅が目の辺りを這うため、）目欲瞑而復警。臂已痺而猶攘。於此之時、孔子何由見周公於髣髴、莊生安得与胡蝶而飛翔」とみえ、前句にある莊子との連想もこれに拠るか。

- 91 騷盟^ハ還^テ易^シ變^シ 騷盟は還つて変じやすし 悦
- 92 衰^ハ鬢^ヲ輒^ク將^ス零^レト 衰鬢は輒く零れんとす 雲
- 93 妾^ハ護^レ落^テ蠅^ヲ幔^ヲ 妾は蠅を落とす幔を護す 召
- 94 生^ハ傾^テ遮^ル雀^ヲ瓶^ヲ 生は雀を遮る瓶を傾く 澗
- 95 皆^ハ山^ヲ移^テ越^テ絶^ヲ 皆山 越絶を移す 心
- 96 上^ハ已^ニ記^ス蘭^ノ亭^ヲ 上已 蘭亭を記す 御
- 97 繚^ハ曲^ヲ巖^ノ腰^ヲ窺^ハ 繚ひ曲がる 巖腰の窺 賢
- 98 仄^カ聞^ク樓^ノ口^ノ莖^ヲ 仄かに聞く 樓口の莖 竹
- 99 眇^メ瀛^ヲ恩^ヲ沢^ヲ深^シ 瀛を眇して恩沢深し 節

(54) 蚺^ハ蟻^ヲ、わらじむし、おめむし。「伊威」とも。蘇軾「静看月窓盤蜥蜴、臥聞風幔落伊威」(上元夜過赴僧守召独坐有感)。

(55) 蘇軾「両手欲遮瓶里雀、四条深怕井中蛇」(三朵花並序)。
 (56) 越の国の辺境、また『越絶書』をいう。司空曙「地遠姑蘇外、山長越絶東」(奉和常舍人晚秋集賢院即事寄徐薛二侍郎)や王十朋「越絶天台温雁蕩、万壑千岩各形状」(宝印叔得小仮山以長篇模写進士欽逢辰和之某次韻並簡欽)などのように、越絶に山が多い。ここは越絶を移してきたかのようなだという。

(57) 「莖」は草の茎、東方朔「以莖撞鐘」(文選「答客難」)などのように、莖で鐘を撞いても響かない。天隱龍沢「鐘噓百花深处楼、亦知僧夢有閑愁。春宵自与寸莖短、月已沈時声欲収」(春寺残鐘)など、鐘の音が仄かに聞こえることと莖で撞くことを取り合わせて詠むことが見られる。「樓口」は鐘楼の辺りの意か。

蒸第十 慶長十八年十一月十三日

- 1 先^ツ視^ル未^ニ形^ニ雪 先づ未形に視るは雪
- 2 皆^ハ山^ヲ雲^ヲ欲^ス凝^レト 皆山 雲凝らんと欲す 勝

3 幾^カ催^ニ吟^イ意^ツ夕 幾ばくか 吟意を催す夕べ

4 乍^チ霽^ア月^{ツキ}将^ニ昇^{ント} 乍ち霽れて月将に昇らんとす

5 窓^{マダ}竹^{タケ}推^シ敲^キ島 窓竹は推敲の島

6 水^{ミヅ}萍^{ヒラ}漂^ヒ泊^ト陵 水萍は漂泊の陵

7 緑^{キナンド}蓑^{カサ}漁^リ紫^{ムラサキ}鳳 緑蓑 漁の紫鳳

8 紅^{ベニ}塔^{ツタ}夢^{ユメ}青^{アヲ}鷹 紅塔 夢の青鷹

9 伝^{ツタ}別^{ワカ}履^{ツキ}痕^{ヅメ}印 伝は別なり 履痕の印

10 智^チ何^ニ繫^ル背^シ灯 智は何ぞ 繫背の灯

(1) 欧陽脩「雲欲凝、雁来応有吾鄉信」(漁家傲)など、雲が静止すること。また蘇軾「秋陰重、西山雪淡雲凝凍」(漁家傲)のように寒気で雲が凍り付くことも。ここは後者。

(2) 前句の賈島と対偶の詩人として、漂泊の生涯を送った杜甫を連想した。杜甫は字が少陵。

(3) 伝説上の瑞祥の神鳥、また官服に刺繡される模様。杜甫「天呉及紫鳳、顛倒在短褐」(北征)。ここでは緑蓑は漁師にとっては立派な紫鳳の制服という意。

(4) 熟語として用例は未見、語意不詳。

11 字^ジ香^カ花^ハ萼^{カク}集 字は香し 花萼集

12 呪^{ノリ}秘^ヒ樺^カ皮^カ楞 呪は秘す 樺皮の楞

13 不^フ食^{シク}雖^モ富^ト景^ニ 不食 景に富むと雖も

14 惟^{コレ}礼^{ナリ}貴^ク頌^ト氷^ニ 惟礼なり 氷を頌つことを貴ぶ

15 暑^カ仮^ル虎^ノ威^ヲ猛^キ 暑は虎威の猛きを仮る

16 闕^{ケツ}望^ム龍^ノ氣^ヲ騰^ル 闕は龍氣の騰るを望む

17 柳^{ヤナギ}嫌^ム霜^ノ粉^ヲ汗^ニ 柳は霜粉の汗すを嫌ふ

18 槿^{キキョウ}厭^ム日^ノ華^ヲ増^フ 槿は日華の増ふを厭ふ

19 貳^{ヒスサ}過^リ呼^ブ回^シ謝 過ちを貳びす 回と呼ぶ謝

20 孰^カ賢^{レル}交^ル夏^ニ曾 孰れか賢れる 夏に交はる曾

(5) 「花萼」は睦ましい兄弟関係の喩え。『新唐書』所収、歐陽脩作の「李又伝」に「弟兄同為一集、号李氏花萼集、総二十卷」とある。宋人の詩句にこの書名が散見されるが、日本での受容は不明。この句は貴重な用例となろう。

(6) 『首楞嚴経』。梵経は樺皮に書写された。

(7) 古代、夏六月に皇帝から高級官や近臣に氷が下賜された。

『周礼』「凌人掌冰、(中略)夏、頒氷掌事」。梅堯臣「頭顱汗匠無富貴、雖有頒氷論官職」(次韻和永叔石枕与笛竹簾)。

(8) 太陽の光彩、精華。『古文真宝』に謝朓「日華川上動、風光草際浮」(和徐都曹)など。

(9) 『論語・雍也』「有顔回者好学、不遷怒、不貳過」。蒸第19に既出。謝は謝朓か、一回謀反の密告をした。

(10) 孔子の弟子の子夏と曾子。『韓非子』「子夏見曾子、曾子曰、何肥也。(中略)自勝之謂強」(喻老)。

21 一唯超^一万^一法^一 一唯^一 万法に超ふ 節

22 独^一妙^一解^三三^一乘^一 独妙^一 三乗を解す 澗

23 酒^一力^一倒^一愁^一海^一 酒力^一 愁海を倒す 御

24 葉^一又^一架^一戲^一棚^一 葉又^一 戲棚に架す 重

25 涼^一從^一櫻^一松^一動^一 涼は櫻松に從ひて動く 勝

26 鬢^一使^一草^一書^一膳^一 鬢は草書をして膳さしむ 御

27 感^レ衆^一愧^レ簫^一永^一 衆を感じしむ 簫を愧づる永 雲

28 專^レ円^一嗣^一遂^一澄^一 円を專にす 遂に嗣ぐ澄 澗

29 乱^一胡^一溪^一説^一教^一 乱胡^一 溪は教を説く 節

30 慶^一惠^一室^一貽^一仍^一 慶惠^一 室は仍に貽す 竹

(11) 『論語・里仁』「子曰、參乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯。」「唯」という一語の回答。

(12) 棕松。宋王炎「燠炉起香霧、櫻松生清風」(用元韻答麟老、其二)。杜甫にも「櫻松子」詩がある。

(13) 慧日山永明寺智覚禪師か。多くの門弟を持ち、『宗鏡録』百巻などを著した。「簫」は固有名詞の一部で、舜が制した音楽という「簫韶」か。『尚書』「簫韶九成、鳳凰來儀」(虞書)とあるように、素晴らしい音楽が鳳凰を惹き付けたという。ここでは高僧の説法が衆生を魅了し、素晴らしい音楽よりも優れているという意か。

(14) 仏図澄。「円」は円相、ここではひたすら参禅すること。仍は人名か、後考を待つ。

(15) 仍は人名か、後考を待つ。

31 刈^レ楚^一潜^一標^一致^一 楚を刈る 潜の標致 御

32 種^一蕉^一泉^一実^一称^一 蕉を種う 泉の実称 雲

33 同^一参^一談^一以^一雨^一 同参^一 談は雨を以てす 溪

34 無^一相^一表^一其^一勝^一 無相^一 其の勝を表す 勝

35 仰^一止^一位^一尊^一径^一 仰止^一 尊に位する径 竹

36 戦^レ凶^ル争^ル長^ク膝^ヲ 戦^レ凶^ル 長^クを争^フ膝^ヲ 節

37 柴^ノ門^ノ常^ニ護^レ筆^ヲ 柴^ノ門^ノ 常^ニに筆^ヲを護^ス 澗

38 桂^ノ窟^ノ屢^ク開^キ菱^ヲ 桂^ノ窟^ノ 屢^ク菱^ヲを開^ク 緒

39 眉^ノ斧^ノ陷^ル胸^ニ刃^ヲ 眉^ノ斧^ノ 胸^ニに陷^ル刃^ヲ 御

40 角^ノ一^ノ弓^ノ戈^ヲ羽^ヲ矧^ム 角^ノ一^ノ弓^ノ 羽^ヲを戈^ヲする矧^ム 澗

(16) 「楚」はいばら。『詩経・漢広』「翹翹錯薪、言刈其楚」。

惠洪『冷斎夜話』「東呉僧道潜、有標致(下略)」(東坡
称賞道潜詩)。標致は風韻や文彩。

(17) 王安石「但当觀此身、不実如芭蕉」(贈約之)、李流謙

「是身如芭蕉、危脆不堅実」(遊無為寺)。「泉」は南泉
普願禪師か、不詳。なお「種蕉」の典故も後考を待つ。

(18) 助けるものがない、また『聚分韻略』に「陞 セウ 田
畦」とある。惟高「牛觸龍吞縷万鈞、福田無相表畦吟」
(衣)を典故とするか。

(19) 『左伝・隱公十一年』「滕侯、薛侯来朝、争長」。「戦凶」
は灰第十55、庚第八77に既出。

(20) 月宮。王十朋「桂窟擢高枝、杏園賞仙葩」(泮宮杏花乃
閨紫微為教官时所殖復用前韻)。「菱」は菱花、ここは菱
花鏡、「菱を開く」は鏡を納める匣を開くこと。月と鏡
の比喩関係はよく見られる。李商隱「玉匣清光不復持、
菱花散乱月輪虧」(破鏡)。

(21) 美色が命を危うくすることの喩え。枚乘「皓齒蛾眉、命
曰伐性之斧」(七発)。蘇軾「鬢霜未易掃、眉斧真自伐」
(次韻錢穆父王仲至同賞田曹梅花)。

(22) 角で飾った弓。『詩経・小雅』「駢駢角弓、翻其反矣」。

『礼記・月令』に「仲夏令月(中略)執干戚戈羽」とみ
える「戈羽」は名詞。ここは「矧」と同じ意味の「七」
の誤写か。「七する」は矧で射ること。

41 野^ノ虞^ノ樵^友善^シ 野^ノ虞^ノ 樵^友は善^シ 雲

42 旅^ノ客^ノ杜^生憎^ム 旅^ノ客^ノ 杜^生は憎^ム 竹

43 蜀^ノ靄^ノ埋^ム呉^笠 蜀^ノ靄^ノ 呉^笠を埋^ム 節

44 湘^ノ波^ノ織^ル越^綾 湘^ノ波^ノ 越^綾を織^ル 御

45 葉^ノ飛^舟盪^陸 葉^ノ飛^舟は陸^ニに盪^ス 竹

46 荷^ノ泛^扇消^蒸 荷^ノ泛^扇は蒸^ヲを消^ス 雲

47 檐^ノ馬^ノ御^風驟^ニ 檐^ノ馬^ノ 風^ニに御^シて驟^ニかなり 溪

48 陰^ノ蟬^ノ観^世憑^ム 陰^ノ蟬^ノ 世^ヲを観^ジて憑^ム 竹

49 八^ノ彭^ノ纒^ノ幻^ノ有^節 八^ノ彭^ノ 纒^ノに幻^ノ有^節 節

玉局仙人（朝中措、其三）。龍図閣直学士として軍備を強化し、敵に恐れられた。

(23) 杜鵑、ほととぎす。「生憎」はあなにく、旅人が「不如帰」と啼く杜鵑を嫌う思い。『文華秀麗集』「生憎柳葉尚舒眉、心如煎、眼不眠」（菅清公「奉和春閨怨一首」）。

(24) 越の国が産する綾。唐羅隱「蜀錦謾誇声自貴、越綾虚説価功高」（繡）に見えるが、「越綾」より「呉綾」のほうが漢詩の用例が多い。蘇轍「呉綾蜀錦非嫌汝、簡淡為生要易供」（和柳子玉紙帳）など。

(25) 陸地で舟を押すこと。『論語・憲問』「羿善射、羿盪舟、俱不得其死然」。ここは落葉を舟と喩え、地面で動き転がる様子を「盪」という。

(26) 「荷」は蓮。前句で葉が舟と見立てられるが、ここでは蓮の大きくて丸い葉が扇と喩えられ、暑さを和らげるといふ。蘇軾「江妃自惜凌波襪、長在高荷扇影涼」（同景文詠蓮塘）。

(27) 檐の先にかかり、風が吹くと響く鈴。宋許玠「渴龍滴水統銅壺、檐馬呼風揺玉佩」（漢宮春夜）など、宋詩に見える。

(28) 熟語の使用例は未見、陰に蛭蟥が生ずることか。王褒「蟋蟀俟秋吟、蛭蟥出以陰」（太平御覽「聖主得賢臣頌」）。

(29) 八百歳も長生きした彭祖。『列仙伝』「彭祖者、殷大夫也。姓錢名鏗、帝顯頊之孫陸終氏之中子、歴夏至殷末八百余歳」。「幻有」は幻のような存在。前句の蛭蟥の命が短いことをいい、また彭祖は実在しないという。

(30) 宋代名臣の范仲淹のこと。李曾伯「小范龍圖老子、大蘇

51 流、截龍淵、劍ニ 流は龍淵の劍に截らる

52 照懸、鍾舎、響ニ 照には鍾舎の響を懸く

53 細斜、天賜、弼ニ 細斜 天は弼を賜ふ

54 酬、醉座、延朋ニ 酬醉 座は朋を延く

55 醉、亦成、文李ニ 酔ひても亦文を成すは李

56 勉、旃首、榜稜ニ 勉めよや旃 榜に首たる稜

57 鸚言、憐講、喫ニ 鸚言 講の喫するを憐れむ

58 鶯曲、調、覺ニ 鶯曲 調ひ癒るかと覺ゆ

59 梅、豈群、芳偶ニ 梅は豈に群芳の偶ならんや

60 叢、僉、四種、僧ニ 叢は僉な四種の僧

(31) 劍の名前。『史記・蘇秦列伝』「韓卒之劍戟皆出於冥山、棠谿、墨陽、合膊、鄧師、宛馮、龍淵、太阿、皆陸斷牛馬、水截鵝雁」。ここは劍で水流を截断することをいう。

(32) 「蠶」は南方の民族、またその舟。蠶戸、蠶舟などの熟語が多く見えるが、蠶舎はほとんど未見。和漢聯句には「潮来埋蠶舎」（慶長十年九月二十七日和漢聯句）など散見され、海人の家の意か。

(33) 「細斜」は前句の網を形容する。類似の漢詩例は唐裴誠「細糸斜結網、争奈眼相鉤」（南歌子詞三首、其三）など。「弼」はたすけること、ここでは漁を行うなど生業の道具。

(34) 酒を酌み交わすこと。韓愈「道旧生感激、当歌発酬酢」（晚秋園城夜会聯句）、蘇軾「一杯賞月露、万象紛酬酢」（十月十四日以病在告独酌）など。

(35) 努力。杜甫「困学違従衆、明公各勉旃」（秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客一百韻）。「稜」はかど、杜少陵の「陵」など、人名の誤写か。

(36) 杜甫に「鸚鵡」詩があり、前句の「稜」が「陵」の誤写であった補強となる。なお、杜甫は科挙試験に失敗している。本来、饒舌多言の鸚鵡が、ここで吃るといのは杜甫への同情か。

(37) 『大方広十輪經』「復次族姓子、有四種僧。何等為四。第一義僧、淨僧、唾羊僧、無慚愧僧」。「叢」は叢林、寺院のこと。

61 錦詩^ハ唐^ハ盛事 錦詩は唐の盛事 竹
62 光^ハ武^ハ漢^ハ中興 光武は漢の中興 御

63 鬢^一字^一拱^一星^一象^一 鬢字 星象を拱くす 澗

64 眼^一塵^一迷^一境^一勝^一 眼塵 境勝に迷ふ 節

65 巖^一棲^一霞^一近^一席^一 巖棲 霞は席に近づく 澗

66 汚^一潦^一廟^一羞^一登^一 汚潦 廟は登に羞む 雲

67 衰^一菊^一遶^一籬^一菜 衰菊は籬を遶る菜 竹

68 禍^一根^一遇^一燒^一苒 禍根 燒に遇ふ苒 溪

69 千^一諄^一虫^一啣^一 千諄 虫は啣啣 雲

70 百^一累^一卵^一兢^一兢 百累 卵は兢兢 澗

(38) 前句の光武帝を受けて、その旧友の嚴光の故事を引く。『後漢書・逸民列伝』「因共偃臥、光以足加帝腹上。明日、太史奏客星犯御坐甚急」。

(39) 目に映る塵埃、また目の前の些細な物事。白居易「眼塵心垢見皆尽、不是秋池是道場」（秋池）。

(40) 水溜まり。柳宗元「壤汚潦以填沕兮、蒸沸熱而恒昏」（閔生賦）。

(41) 雜草、刈られた後に生え出した草。

(42) 「諄」は繰り返して教え諭すこと。ここで「千諄」はそれを更に強調してたくさんの方の言葉の意か。蘇軾「著書已

絶筆、一黙含千諄」(崔文学甲携文見過、蕭然有出塵之姿、問之、則孫介夫之甥也。故復用前韻、賦一篇、示志舉)など。

(43) 多くの想念と執着。黄庭堅「予生久遭回、百累未一謝」(宿山家效孟浩然)。こゝは累卵の意。

71 楼 聳^ア 疑^レ 攀^ル 斗^ヲ 楼聳えて斗を攀るかと思ふ

72 炎^レ 濛^ト 思^ヒ 寄^ル 檜^ニ 炎濛として思ひ檜に寄す

73 松^一 琴^多 挑^ム 鶴^ヲ 松琴 多くは鶴を挑む

74 茶^一 鼎^已 鳴^シ 蠅^ヲ 茶鼎 已に蠅を鳴かしむ

75 秀^レ 宋^ニ 英^才 谷^一 宋に秀づ 英才の谷

76 勝^レ 梁^ニ 校^尉 膺^一 梁に勝る 校尉の膺

77 非^ト 非^ヲ 今^一 白^ノ 鏡^一 非を非とす 今白の鏡

78 幻^ト 幻^ヲ 電^光 繩^一 幻を幻とす 電光の繩

79 苛^一 政^不 寒^ノ 慄^一 苛政 寒からずして慄く

80 宗^一 猷^以 道^ヲ 弘^ム 宗猷 道を以て弘む

(44) 檜梁。「礼記・礼運」「昔者先王未有宮室、冬則居宮窟、夏則居檜梁」。

(45) 煮え立つ茶鼎の音。黄庭堅「酒杯未竟浮蟻滑、茶鼎已作蒼蠅鳴」(次韻李任道晚飲鎖江亭)。

(46) 前句の「谷」は黄山谷こと黄庭堅。南朝梁の李膺。後漢に同名の李膺、字元礼という名臣がいた。梁武帝から「今膺何如昔膺」と問われるや、「今勝昔」と答えたという(南史・李膺伝)。

(47) 熟語として用いられるのは違和感があるが、『三体詩』「高歌一曲掩明鏡、昨日少年今白头」(許渾「秋思」)など、老いを嘆く表現としてよく用いられる「今白头」に基づく。

(48) 「電光」と「繩」の取り合わせは珍しい。本来は稲妻の比喩として「電鞭」を使うべきところ、押韻するために「繩」に改めたか。曹植「執電鞭、馳飛驎」(陌上桑)など。

(49) 「慄」の誤写。不寒而慄。

(50) 道を広めること。仁如集堯「説禅念仏振宗猷、郷国錦旋真昼遊」(惠阜育英禅师今兹結制據後板之位揮毫(以下略))。

81 瞞^レ 他^ヲ 行^ヲ 喝^ヲ 濟^一 他を瞞す 喝を行ずる 溪

82 隠^レ 獵^ニ 潜^ル 蹤^ヲ 能^一 獵に隠る 蹤を潜る能 御

83 村^一 市^鬻 薪^ヲ 閤^一 村市 薪を鬻ぎて閤し 緒

84 晴^レ欄^レ慕^テ梓^ヲ凭^ル 晴欄 梓を慕ひて凭る 溪

85 伺^テ魚^ヲ追^テ北^ヲ雁^ヲ 魚を伺ひて北ぐるを追ふ雁 節

86 斉^シ鷓^ニ徙^レ南^ニ鵬^ニ 鷓に斉し 南に徙る鵬 潤

87 要^ス挟^ム泰^ヲ吾^ノ学^ヲ 泰を挟まんと要するは吾が学 雲

88 欲^ス書^ク魯^ノ彼^ノ懲^ヲ 魯を書せんと欲するは彼の懲 潤

89 触^レ瀾^ニ蓮^ヲ絶^ス筆^ヲ 瀾に触れて蓮は筆を絶す 御

90 因^テ籟^ニ絮^ヲ翻^シ繪^ヲ 籟に因りて絮は繪を翻す 節

(51) 臨濟宗の公案集『無門関』に基づくか。「巖喚彦和尚、
毎日自喚主人公、復自応諾。乃云、惺惺着。喏。他時異
日、莫受人瞞。喏喏」(十一、巖喚主人)。

(52) 六祖慧能が五祖弘忍から法を受け継ぎ、「後伝法衣令隠
於懷集四会之間」(景德伝灯録・卷五)とあるように、
数年間獵師と伍して踪跡を隠していたというが、現段階
では文献記録が未確認。

(53) 六祖の家は貧しく、薪を売って母を養ったという。『宋
高僧伝』「父既少失母且寡居、家亦屢空業無腴産。能負
薪矣日售荷擔」(卷八)。

(54) 梓は桑とともに父母が子孫のことを思いやって植えてく
れるものとされる。『詩経・小弁』「維桑与梓、必恭敬止」。

ここは前句の六祖の故事に母親を養うことからの連想
で、親を慕うことをいう。

(55) 『莊子・逍遙遊』「有鳥焉、其名為鵬、(中略) 然後因南、
且適南冥也。斥鷃笑之曰、彼且奚適也、我騰躍而上、不
過數仞而下、翱翔蓬蒿之間、此亦飛之至也、而彼且奚適
也、此大小之弁也」。ここでははるばる南に徙る鵬の行
動は、実は短い距離を飛ぶ鷓に斉しいという。

(56) 『孟子・梁惠王上』「挟泰山以超北海、語人曰、我不能、
是誠不能也」。

(57) 「魯」と「魚」とが字形が似ているから誤写される。「書
字人知之、猶尚写之多誤。故諺曰、書三写、魚成魯、虚
成虎、此之謂也」。灰第十八1に既出。ここはその誤写の
懲。

91 利^ノ路^ノ濼^ノ耶^ノ瞿^ノ 利路 濼か瞿か 御

92 叡^ノ齡^ノ嵩^ノ又^ノ恒^ノ 叡齡 嵩また恒 溪

93 時^ノ清^ノ農^ノ道^ノ舜^ノ 時清くして農は舜を道ふ 緒

94 古^ノ諱^ノ母^ノ称^ノ徼^ノ 古諱みて母は徼と称す 勝

95 巢^ノ燕^ノ慈^ノ孤^ノ弱^ノ 巢燕 孤弱を慈しんず 雲

96 晚^ノ蟬^ノ続^ノ雅^ノ音^ノ 晚蟬 雅音を続く 節

97 瀑^カ氷^ル冬^カ 訝^カ 嘷^カ 御

瀑^カ氷^ルりて冬^カ嘷^カるるか^カと訝^カる 御

98 秋^ニ半^ニ歳^ニ 忻^ニ登^ニ 澗

秋^ニ半^ニばにして歳^ニ登^ニる^ニこと^ニを忻^ニぶ 澗

99 奏^ニ撃^ニ壤^ニ歌^ニ鳥^ニ 竹

撃^ニ壤^ニの歌^ニを奏^ニするは鳥 竹

100 得^ル探^ル春^ル意^ル 騷^ル 雲

探^ル春^ルの意^ルを得^ルるは騷^ル 雲

(58) 灑^ル瀆^ル堆^ルと瞿^ル塘^ル峡、いづれも長^ル江^ルの難^ル所^ル。魚^ル第^ル六^ル九^ルに既^ル出^ル。

(59) 「母」は「母」の誤^ル写^ルか。『礼^ル記^ル・檀^ル弓^ル』「夫^ル子^ル之^ル母^ル名^ル徵^ル在^ル、言^ル在^ル不^ル称^ル徵^ル、言^ル徵^ル不^ル称^ル在^ル」。こ^ニこ^ニは諱^ル名^ルとして徵^ルを称^ルすとい^ルう。

(60) 用^ル字^ルがよ^ク似^ルた詩^ル例^ルとして、宋^ル張^ル方^ル平^ルの詩^ルに「庶^ル幾^ル災^ル沴^ル革^ル、幸^ル獲^ル忻^ル穀^ル登^ル」(吳^ル中^ル暑^ル雨^ル)とみ^ルえ^ルる。

(61) 撃^ル壤^ル歌^ルは簫^ル第^ル二^ル五^ルに既^ル出^ル。

(62) 去^ル勢^ルされ^ルた馬^ル。漢^ル詩^ル文^ルの使^ル用^ル例^ルはこ^ニこ^ニ稀^ルで、こ^ニこ^ニは押^ル韻^ルするた^ルめ^ルの使^ル用^ルか。

尤^ル第^ル十^ル一^ル 慶^ル長^ル十^ル七^ル年^ル二^ル月^ル二^ル十^ル二^ル日^ル

1 禁^ル苑^ル花^ル兼^ル月^ル 禁^ル苑^ル 花^ルと月^ルと

2 色^ル香^ル拔^ル二^ル両^ル尤^ル一^ル 色^ル香^ル 両^ル尤^ルを拔^ルきん^ルず 梅^ル心^ル

3 清^ル標^ル松^ル又^ル竹^ル 清^ル標^ル 松^ルまた竹^ル

4 貞^ル節^ル仰^ルレ洪^ル一^ル休^ル 貞^ル節^ル 洪^ルを仰^ルぐ 寿^ル洪^ル

5 鳳^ル叫^ル嵩^ル一^ル呼^ル近^ル 鳳^ル叫^ルんで嵩^ル呼^ル近^ルし 勝^ル

6 蜺^ル奇^ル唐^ル一^ル絶^ル倅^ル 蜺^ル奇^ルにして唐^ル絶^ル倅^ルし 賢^ル

7 味^ル禪^ル終^ル日^ル嚼^ル 味^ル禪^ル 日^ルを終^ルふるま^ルで嚼^ルす 竹

8 偽^ル隱^ル对^ル林^ル一^ル羞^ル 偽^ル隱^ル 林^ルに对^ルして羞^ルぶ 廣^ル

9 知^ル是^ル譏^ル一^ル顛^ル孔^ル 是^ルを知^ルりて顛^ルを譏^ルる孔^ル 節^ル

10 無^ル為^ル聞^ル老^ル丘^ル 無^ル為^ル 老^ルに聞^ルく丘^ル 御^ル

(1) 熟^ル語^ルとして用^ル例^ルは未^ル見^ル。兩^ルつ^ルの尤^ル物^ルの意^ル味^ルか。尤^ル物^ルは珍^ルしく優^ルれたもの、こ^ニこ^ニは花^ルと月^ルを指^ルす。宋^ル詩^ルでは劉^ル克^ル莊^ル「造^ル化^ル生^ル尤^ル物^ル、居^ル然^ル冠^ル群^ル芳^ル」(梅^ル花^ル一^ル首^ル)と梅^ル花^ルを尤^ル物^ルと詠^ルむ。また「拔^ル尤^ル」は特^ルに優^ルれたものを選^ルび出^ルすこと。策^ル彦^ル周^ル良^ル「梅^ル若^ル真^ル梅^ル心^ル拔^ル尤^ル、雪^ル耶^ル非^ル雪^ル亦^ル堪^ル儔^ル」(題^ル画^ル)など。

(2) 清^ルらか^ルで美^ルしい様^ル子^ル。王^ル十^ル朋^ル「茗^ル溪^ル昨^ル夜^ル梅^ル花^ル発^ル、目^ル对^ル清^ル標^ル有^ル所^ル思^ル」(次^ル韻^ル張^ル叔^ル清^ル見^ル寄^ルなど、宋^ル詩^ルに用^ル例^ルが多^ルい。

(3) 熟^ル語^ルとして洪^ル福^ルに同^ルじであるが、こ^ニこ^ニでは人^ル名^ルか。慧^ル洪^ル、道^ル休^ルの二^ル人^ルをい^ルう可^ル能^ル性^ルが有^ルり、定^ルか^ルでな^ルい。

(4) 武^ル帝^ルが嵩^ル山^ルに登^ルり、吏^ル卒^ルが万^ル歳^ル三^ル唱^ルの声^ルを聞^ルこえ^ルたとい^ルう(漢^ル書^ル・武^ル帝^ル本^ル紀)。以^ル来^ル、帝^ル王^ルに对^ルして臣^ル下^ルが万^ル歳^ル

と連呼することを「嵩呼」という。

(5) 『五灯会元』「京兆府蜆子和尚、不知何許人也。事跡頗異、居無定所、冬夏惟披一衲、逐日沿江岸掇蝦蜆、以充其腹、居民目為蜆子和尚」。江月宗玩の『欠伸稿』に「笑呈蜆子、禅味無窮」とある。「唐絶」は唐代にその記録が絶えて伝わらない意味。「倅」は特に典拠はなく、押韻するためか。

(6) 周顒。孔稚珪が「北山移文」で「偽隱」と指摘し批判した。前句の「偽隱」を受ける。

11 麴^レ君^リ 勝^リ古^一聖^ニ 麴^レ君^リ 古^一聖^ニに勝れり 澗

12 英^一主^ニ 選^ス藩^一侯^ヲ 英^一主^ニ 藩^一侯^ヲを選す 雲

13 輕^レ輦^ヲ 執^ル綏^一蝶 輦^ヲを輕^クして綏^ヲを執^ル蝶 重

14 忘^レ機^ヲ 伴^フ釣^一鷗 機^ヲを忘^テして釣^ニに伴^フ鷗 心

15 招^レ詩^ヲ 湖^ニ左^ニ手^ヲ 詩^ヲを招^{キテ}湖^ニは手^ヲを左^ニにす 洪

16 運^メ斧^ヲ 嶺^ニ童^ノ頭^ヲ 斧^ヲを運^{ビテ}嶺^ニは頭^ヲを童^ノろ^ニにす 勝

17 鐘^一響^テ若^ク雲^一淺^シ 鐘^ノ響^{キテ}若^ク雲^ノ淺^シ 賢

18 礎^一沈^テ吳^一楚^一幽^{ナリ} 礎^ヲ沈^{ミテ}吳^ノ楚^ノ幽^{ナリ} 竹

19 霜^ニ之^ヲ 衰^レ鬢^一杜^一 之^ヲを霜^ニにす 衰^レ鬢^一の杜^一 廣

20 朝^ニ必^キ具^フ一^レ臣^一求^ル 朝^ニには必^ズ具^フ一^レ臣^一の求^ル 澗

(7) 酒のこと。李白「古来聖賢皆寂寞、惟有飲者留其名」(將進酒)など、酒や飲者を褒める表現が多い。

(8) 『論語・郷党』「昇車、必正立執綏」。

(9) 頭が禿げること。韓愈「頭童齒豁、竟死何裨」(古文真宝「進学解」)。ここは山が斧に削ぎ落とされて禿げたかのようなという意味。

(10) 『論語・先進』「今由与求也、可谓具臣矣」。「求」は孔子の弟子の冉有。

21 鼙^一鼓^ヲ 報^ス江^一寺^ニ 鼙^一鼓^ヲ 江^一寺^ニに報^ス 御

22 蚪^一篇^ヲ 親^ム暮^一秋^ヲ 蚪^一篇^ヲ 暮^一秋^ヲを親^ム 洪

23 枯^レ枯^一 吾^レ敬^一木 枯^レを枯^トす 吾^レは敬^ム木 雲

24 姓^ト姓^ヲ 彼^レ空^一篋 姓^ヲを姓^トす 彼^レの空^一篋 澗

25 帽^一宇^ハ東^ノ坡^ノ界 帽^一宇^ハ東^ノ坡^ノが界 心

26 筭^一齡^ハ北^ノ鬱^ノ州 筭^一齡^ハ北^ノ鬱^ノ州 廣

27 名^一飛^{ビテ}仙^ハ羽^一化 名^一飛^{ビテ}仙^ハ羽^一化 竹

28 耳順みづかみ某ある鸚留うま 耳順みづかみふ 其の鸚留 廣

29 寒柳ふゆやなぎ今純いまじゆん俚り 寒柳 今純はしきは俚なり 御

30 蟠桃ばんとう其その実み偷う 蟠桃 其の実は偷む 心

(11) 『詩経・靈台』「鼙鼓逢逢、矇瞍奏公」。

(12) 前句に続き、二句とも出典は不明。

(13) 蘇軾は帽子にこだわりがあり、当時の文士に真似されたという。蘇軾「更着短檐高屋帽、東坡何事不違時」(次韻子由三首、其三、椰子冠)。

(14) 鬱単越、四大洲の一つ、須弥山の北にある。「箒齡」は長寿。

(15) 『論語・為政』「吾十有五而志於学。(中略)六十而耳順」。

31 像かた緜山てい不老に 緜ていに像りて山は老いず 雲

32 擒こ濟雪し称と響つ 濟しを擒にして雪は響と称す 勝

33 筆ふで字城じ雄傑ゆう 筆は字城の雄傑 洪

34 衲な祇林ぎ贗ごう浮う 衲は祇林の贗浮 澗

35 桂開き春重はる徑みち 桂開きて春は徑を重す 心

36 荔熟りじく歳とし煩わづ澗み 荔熟して歳どし澗を煩はす 雲

37 暑あつ有あ紅塵こうじん惑まど 暑に紅塵の惑ひ有り 竹

38 温あたた而して黄道周わうだうしゅう 温にして黄道周し 御

39 堯階ぎょうかい雲立うんたつ下した 堯階 雲は下に立つ 勝

40 舜雨しゆんう沢たく單たん阪ばん 舜雨 沢は阪に單ぶ 賢

(16) 緜山、王子喬が仙人となった場所。『列仙伝・王子喬伝』「告我家、七月七日待我於緜氏山顛」。ここは緜山に似

ていて、山自体が老いない。

(17) 呉元濟。李愬が風雪の夜に奇襲し、元濟を擒にした。李愬の故事は、灰第54、歌第54・85、庚第876に既出。

(18) 浮は浮屠、浮図、贗浮は偽物の仏また僧か。仁如集堯「那箇身其端的底、誰歎对者贗浮図」(達磨贊)。

(19) 涪州、荔枝の産地。蘇軾「永元荔支来交州、天宝歲貢取之涪」(荔支歎)。

(20) 帝堯の住む家の階段。楮載「焉知万里連雲色、不及堯階三尺高」(長城)、汪遵も同題で「雖然万里連雲際、争及堯階三尺高」と詠む。いずれも堯階が雲より高いことをいう。

(21) 阪は海阪、沿海部を指す。宋郭祥正「炎炎二聖作、徳沢覃海阪」(独遊薬洲懷穎叔修撰)によく似ている。

41 虫^{ムシ}識^シ夜^ヤ絃^{シヨ}趣^ソ 虫は夜絃の趣を識る

42 鳥^{トリ}妨^{サマシ}午^ヌ枕^{シヨク}遊^ユ 鳥は午枕の遊を妨ぐ

43 樂^{ガク}無^ム求^{モトメ}至^ニ樂^{ガク} 樂は無求の至樂

44 愁^{ウレシ}萬^{マン}斛^{コク}牢^{ラウ}愁^{ウレシ} 愁は万斛の牢愁

45 京^{キョウ}二^ニ張^カ心^{シン}栖^シ 京二つ 張が心栖

46 霞^{カサ}余^ヨ魯^ロ督^{トク}郵^ユ 霞余 魯の督郵

47 渡^{ワタ}炉^ロ金^{キン}仏^{ブツ}煨^イ 炉を渡りて金仏煨す

48 過^{ワタリ}夏^カ蠟^{ロウ}人^{ニン}修^{シュ} 夏を過ぎて蠟人修す

49 訝^{ウタガハシ}有^{アル}漢^{カン}蕭^{シヨウ}海^{カイ} 有漢の蕭と訝るは海

50 比^ヒ長^{チヨウ}恨^{コン}伝^{デン}劉^{リウ} 長恨伝に比するは劉

(22) 午睡の枕。唐詩にはなく、宋詩に突如多く見られる。王安石「午枕花前簾欲流、日催紅影上簾鉤」(午枕)など。

(23) 多くの愁。蘇軾「万斛羈愁都似雪、一壺春酒若為湯」(次韻樂著作送酒)。楊万里「一生句里万斛愁、只白秋來千丈髮」(和石湖居士范至能与周子允夜遊石湖松江詩韻)。

(24) 張衡の漢賦代表作「西京賦」と「東京賦」。蘭坡景菑「從

古文章推二京、昇仙橋上独伝名」(昇仙橋図)。

(25) 「魯督郵」が意味する人物は不明、後考を待つ。

(26) 『続伝灯録』「西天於結夏日鑄蠟人藏土窟中。結夏九十日、戒行精潔則蠟人氷。不然則蠟人不全。故号為僧蠟」(第二十八卷)。

(27) 「有漢」はすなわち漢代、蕭は蕭何のことか。しかし「海」が誰を指すかは後考を待つ。

(28) 劉は武帝の劉徹のことか。李夫人を寵愛し、形見を眺めてその死を偲んでいた。

51 棹^{セウ}漁^{リョ}歌^カ反^{ヘン}和^ワ 棹漁 歌は反して和す

52 文^{ブン}士^シ智^チ陰^{イン}謀^{ボウ} 文士 智は陰かに謀る

53 懷^{イハヒ}少^{シウ}恋^{レン}潮^{シヨウ}愈^ユ 少を懐く 潮を恋ふ愈

54 扶^{オモ}衰^シ休^ユ頴^{エイ}歐^{オウ} 衰へを扶く 頴を休する欧

55 附^{ツキ}恩^{オン}蠅^{シヨウ}臭^{シウ}幾^キ 恩に附くは臭に蠅あること幾ばくぞ賢

56 鞭^{ムチ}学^{ガク}馬^バ書^シ不^フ 学を鞭うつて書に馬ありや不や

57 郷^{キョウ}話^ワ灯^{トウ}胥^コ慶^{ケイ} 郷話 灯は胥ひ慶す

58 商^{シヤウ}聽^{テイ}風^{フウ}為^ニ憂^ウ 商聽 風は為に憂ふ

59 蕉^ハ彰^ス虚^ノ幻^ノ境^ニ

廣

65 聯^{ナリ}列^{カモノ}乘^ニ來^ル葉^ハ

列^ゴが乗るものに聯なり来るは葉

賢

60 槿^ハ観^ニ郊^ヲ浮^リ漚^ニ

槿は郊浮の漚を観ず

御

66 中^リ孫^カ鏃^ニ得^ル楸^ハ

孫^ゴが鏃に中り得るは楸

洪

(29) 「潮」は韓愈が貶謫された潮州のこと。「懷少」は不明、少陵すなわち杜甫を懐かせることか。

67 屯^ハ兵^ヲ沙^ノ陣^ノ蟻

兵を屯ろす 沙陣の蟻

御

(30) 歐陽脩。韓愈などと唐宋八大家と称され、文体改革運動を牽引した一人。「増補国華集」「退之」項に「文興八大

68 養^ヲ拙^ヲ旧^ノ巢^ノ鳩

拙を養ふ 旧巢の鳩

賢

之衰」とある。

69 喚^ニ寧^ノ馨^ノ兒^ト杖

寧^ダ馨兒と喚ぶは杖

竹

(31) 歐陽脩に「恨蒼蠅賦」がある。

(32) 青第九35に既出。「出門莫恨無人随、書中車馬多如簇」(古文真宝「真宗皇帝勸学」)。

70 接^ニ那^ノ个^ノ漢^ヲ毬

那个の漢を接するは毬

廣

(33) 秋の首。熟語としての用例は少ないが、韓愈「雨中寄孟刑部幾道聯句」に「商聴饒清聳、悶懷空抑噫」とある。

(35) 須菩提、釈迦の十大弟子の一人。

(34) 不詳。ただし地名としての「郊」は東海郡に属し、ここでは東海の漚の代わりに用いる可能性も考えられようか。

(36) 靈鷲山、如来が法華経を講じたとされる仏教の聖地。ここでは鷲の意味。

(37) 『庄子・駢拇』「長者不為有余、短者不為不足。是故鳧脰雖短、統之則憂。鶴脰雖長、斷之則悲」。

(38) 『庄子・逍遙遊』「夫列子御風而行」。すなわち「列が乗るもの」は風で、それに伴って葉が舞い散る。

(39) 孫は姓か、典拠は不詳、後考を待つ。

(40) 俗語、このような(良い)子供という意。白玉蟾「仁皇恩賜紫衣時、方是寧馨七歲兒」(賛歴代天師、第二十七代諱象中字拱辰)。

61 露^ハ統^ツ空^ノ生^ノ涙^ヲ

露は空生の涙を統く

勝

62 墳^ハ留^ハ藏^ノ教^ノ疔^ニ

墳は藏教の疔を留む

澗

63 鷺^ハ靈^ノ鵬^ノ恥^レ大^ヲ

鷺^ゴ靈 鵬は大を恥づ

雲

64 鳧^ハ短^ノ鶴^ノ存^ス修^ヲ

鳧^ゴは短し 鶴は修きを存す

心

71 存^ハ荊^ノ公^ガ六^ノ芸^ハ

存は荊公が六芸

御

72 雅ハ拾得ト一流ル 雅は拾得の同流 雲

73 笑一具除棠少 笑具 棠を除かば少からん 麿

74 偉才論藻抽 偉才 藻を論じて抽つ 竹

75 冢一蝸魚或魯 冢蝸 魚或いは魯 洪

76 楚一雀蝠其鷺 楚雀 蝠それ鷺 澗

77 秦一火儒焦思 秦火 儒は思を焦がす 心

78 瀉一山僧運籌 瀉山 僧は籌を運らす 御

79 經一畚耕易退 經畚 耕して退き易し 賢

80 佳一水翫堪俦 佳水 翫んで俦はるに堪へたり 雲

(41) 王安石。黄庭堅「荆公六芸学、妙処端不朽」。六芸はすなわち六経。

(42) 笑い種、また笑われる対象。「除棠少」はすなわち棠が笑われるもの、「海棠醉睡」の故事が想起されるが、前後の關係から定め難い。

(43) 辞藻、嘉藻。詩文や文彩の意。

(44) 魚と魯の字形が近く間違えられること。灰第十1、蒸第十八8に既出。

(45) 黄鷺、鷺。古澗「楚雀一遷喬木後、万年枝上有斯声」(黄鷺語太平)。「鷺」について『聚分韻略』「シウ、シキ、ミツトリ、ワシ」とある。但し蝠と鷺の關係は後考を待たす。

(46) 瀉山禪師、支第四28句、刪第十五23句に既出。

(47) 經典を詠み、仏道修行することを耕作と比喻するか。韓愈「文章豈不貴、經訓乃舊畚」(符讀書城南)。

(48) 「俦」は「トモカラ」(聚分韻略)。その意味から「ともなわる」と訓読したいが、底本の「トラハル」は不明。蘇軾「山川良甚似、水石亦堪俦」(壬寅二月有詔令郡吏分往屬県減決囚禁。自十三日受命出府、至宝鷄(中略)遂並南山而西)。

81 梅影写真面 梅影 真の面を写す 澗

82 薄一揜転凜眸 薄揜 凜たる眸りを転ず 麿

83 志一千帰計夢 志は千 帰計の夢 竹

84 偈一嗣承酬 偈は一 嗣承の酬ひ 澗

85 跌一坐石苔脚 石に跌坐するは苔脚 御

86 屏一居世橘叟 世に屏居するは橘叟 洪

87 鹿一迹猪混跡 鹿迹 猪は跡を混ず 賢

88 鶻薦 毳 拈 鬪

鶻薦 毳は鬪を拈ず

勝

89 韶 演 簡 安 法

韶は簡安の法を演ぶ

心

90 会 倡 已 墜 猷

会は已墜の猷を倡ぶ

竹

(49) 『聚分韻略』「眸 一子、マナシリ」とある。「凜眸」の

組み合わせは稀であり、「黒衣横巨剣、被髮凜双眸」と、

80 句「堪俦」と同じく蘇軾詩「壬寅二月有詔（以下略）」

に見えるのが興味深い。また「薄梢」の熟語としての用

例は未見、意味も不可解だが、「薄梢」の可能性がある

う。柳宗元「開曠延陽景、回薄攢林梢」（遊朝陽岩遂昇

西亭二十韻、其二）とあり、「回薄」は廻り巡ること。

(50) 『太平広記』にみえる橘叟の故事。「有巴邛人、不知姓。

家有橘園、因霜後、諸橘尽収、余有二大橘、（中略）剖

開、每橘有二老叟、須眉皓然（下略）。陽第七46に既出。

「屏居」は隱遁すること。蘇軾「親嫌妨鶻薦、相對発微泄」

(51) 賢良を推薦すること。蘇軾「親嫌妨鶻薦、相對発微泄」

(52) 唐末の高僧徳韶禪師か。「簡安」は仏語か、不詳。

(53) 猷は道、「徽猷」は立派な道、また計画。そのような道

が墜ちた（墜猷）ので法会で倡えるという。

洪

91 溪 声 何 乱 判

溪声は何の乱判ぞ

洪

92 野 性 本 監 収

野性 本は監収

潤

93 菲 供 猿 撃 鉢

菲供 猿は鉢を撃く

雲

94 列 班 鵠 拝 旒

列班 鵠は旒を拝す

廣

95 胡 為 干 履 摯

胡為れぞ 履を干す摯

御

96 出 則 与 枚 鄒

出づることは則ち枚を与する鄒

心

97 国 器 治 賢 鼎

国器 賢を治むるは鼎

勝

98 水 輪 携 客 棧

水輪 客を携はるは棧

竹

99 美 談 無 類 壁

美談 類無き壁

賢

100 眺 望 捲 簾 鉤

眺望 簾を捲きて鉤す

雲

(54) 『虚堂和尚語録』「嗟末運正脈將沈、想余光聊菲供」（卷

八）。

(55) 階級ごとに整理する朝官。東第一23に既出。

(56) 北宋神宗の重臣劉真、官制改革である「元豊改制」に関

わった。多くの官僚が整然と隊列を成すという前句を受

ける。

(57) 齊の説士鄒陽、淮陰の枚乗と交友した。李白「荊門倒屈

宋、梁苑傾鄒枚」（贈王判官時余扁隱居廬山屏風疊）。

(58) 国を治める人材。東第一22に既出。

(59) 月輪。蘇軾「夜半老僧呼客起、雲峰闕処湧水輪」（宿九

仙山)。

(60) 瑕類、欠点。『淮南子・汜論訓』「明月之珠、不能無類」。

(よう) こんほう・武蔵野大学准教授)